

げ出すと太郎は「あーあ、」と云ひながら引張られて行きます。スルト見て居た一人の子供が飛び出して太郎の帯際とつて引き戻そうとしました。が、是も吸い付いてしまつて放れ、ばこそ、太郎と一所に矢張りあゝと云ひながら外へ引づられて行きました。是は大變だと思つて外の子ども一どきに掛りましたが是もいけません。皆吸い付いてしまつてまるで芋虫コロコロか子を取ろく様の様に珠々つながりになつてわー泣きながら引っぱられて行きました。此騒ぎでお母さんも番頭も子僧も出て來ましたが、つかまらうものなら誰れでも彼れでも皆くつついてしまひますので困つて居ましたが、鶯鳥は平氣で大勢の子供達を引つぱつて臺所からお庭、お庭から往來へ出てだん々々町の方へ行きますので町では大さわぎ「ヤア〜面白〜」と往來の人はやして居ますスルト向ふから歸つて來たのはお父さんです。お父さんは此様を見て驚いて「是は一体何うしたん

だ」と云ひながら鶯鳥の首を捕へると皆のくつ付いて居たのがばら〜と放れました。ソレで遂々太郎の腕白がお父さんに知れて太郎は大層しかられましたので是からはおとなしいよい子になりましたとさ。めでたし〜

おはなし

七、狐と山羊

筑紫の媼

或日一正の狐が井戸に落ちて出られないで困つて居ると、丁度通り合した山羊が見付け出して「大將、井戸の水は甘いかね」ヤ結構だよ早く来て呑まないか」山羊は深い考もなく飛びこむと、狐は之を踏臺にして上に飛び上り「さよならありがたうそはあんまりい、所ぢやないよ風をひきたまふな」と言ひ捨て、行つてしまひました。何と憎らしい狐ぢやありませんか、悪者には用心しなければなりません。

八、御醫者様

昔上手な名高い御醫者がありましたが、或晩一人の老婦人が來まして「先生どうか息子の病氣をなほして、いたゞきたうござります」何病ですか」はい私の息子はどうも泥棒をして困りますからどうか根性のなほります様に願います」御醫者様はしばらく考へて居りました、やがて或丸薬を與へてかへしました、あとで門人が「先生、泥棒につけるのは何といふ薬でござりますか」とたづねますと「あれか、あれは肺を乾かす薬であれを飲むといつても咳をするから人の家へ忍びこむ事ができない、其中に悪いくせもなほるだらう」